

博士研究員「研究成果概要」様式

氏名	小林正法
所属	文学研究科 応用心理科学研究センター（大竹研究室）
研究課題	情動概念の再構築：心理科学の新たな挑戦

2016年度は、情動概念の再構築を目指すための基盤となる研究として、特定の情動に誘導する手法の検証と誘導した情動状態の特徴を探る研究を中心に研究活動を行った。これらの研究に加えて、情動による社会的認知の変化についても研究を行った。

ヒトは様々な種類の情動を感じるとされ、情動状態に関心を持つ心理学研究においては特定の情動状態に誘導することが不可欠である。そこで、ネガティブ情動、ポジティブ情動のそれぞれの状態に誘導することが期待される動画を用い、それぞれの情動状態に誘導が可能か、そして、それらの情動状態の生理的・心理的な特徴を探る研究1を行った。実験では、ネガティブ情動とポジティブ情動を誘導するための動画をそれぞれ2種類、統制条件となる動画（ニュートラル動画）の2種類、計6種類の動画を用意し、実験参加者にそれらの動画を視聴してもらった。動画視聴の前後に感情価と覚醒度を質問紙によって測定し、情動状態の主観的指標とした。また、動画視聴中の脳波、心電図、皮膚電位などの生理指標を測定した。脳波に関しては、これまでの研究から、前頭における α 波の左右差を情動状態の指標として取り上げた。一般に、ポジティブ情動状態では、左半球よりも右半球の α 波の値が大きくなり、ネガティブ情動状態では、右半球よりも左半球の α 波の値が大きくなるとされている。実験を行った結果、主観的指標においては、動画視聴により、ネガティブ情動状態及びポジティブ情動状態に誘導されたことが確認された。加えて、一部の動画においては、視聴中の生理指標において、ネガティブ情動、ポジティブ情動それぞれに特徴的な変化が見られた。例えば、前頭の α 波の左右差に関しては、ポジティブ情動動画、ネガティブ情動動画のそれぞれで、先行研究と類似したパター

ンが見られた。その他の生理指標については現在分析を行っている。このように、研究1によって、特定の情動状態へ誘導するために動画が有用であることを確認できた。加えて、脳波において、ネガティブ情動とポジティブ情動における特徴的な変化も見られた。研究1の成果は、2017年度に開催される第81回日本心理学会大会で発表する予定である。

また、ヒトはネガティブ情動、ポジティブ情動といった単一の情動だけでなく、それらが混じり合った複合情動（混合情動）も感じるとされている。そのような複合情動の1つに懐かしさ情動（ノスタルジア）がある。懐かしさ情動は、過去に対する郷愁・哀愁として定義されている。懐かしさ情動は、楽観性や人生満足感、創造性などと正に関連することが明らかになっている。しかしながら、懐かしさ情動状態における生理的特徴については未だ不明である。複合情動における生理的特徴がポジティブ情動とネガティブ情動のどちらの生理的特徴と類似するかを示すことは、ヒトの情動の理解の一助となることが期待される。そこで、研究1の検討と同様の手法を用いて、懐かしさの生理的特徴を明らかにする実験を実施した（研究2）。実験では、動画ではなく音楽を用いて懐かしさ情動への誘導を目指した。実験の結果、質問紙による主観的評価においては、懐かしさが誘導されていたことが確認された。それに対し、生理指標においては、自律系指標のうち、心拍変動における高周波成分において懐かしさに特徴的な変化が見られた。一方で、脳波においてはそのような変化は見られなかった。研究2から、懐かしさ情動の生理的特徴が自律系指標に反映されることが明らかになった。研究2の成果についても、2017年度に開催される第81回日本心理学会大会で発表する予定である。

さらに、研究2の知見を基に、このような懐かしさ情動を感じる程度（喚起量）に個人差が見られるかどうかを研究3として検討した。これまでの研究から、持続したネガティブ情動状態を特徴とする抑うつ傾向の高さが懐かしさ情動の喚起量と正に関連することが示されている。その一方で、懐かしさ情動を実験的に誘導した研究から、懐かしさが喚起されるほど、主観的幸福感というポジティブ情動が高まることも示されている。これらの知見は、懐かしさ情動の喚起量がネガティブ情動、ポジティブ情動のどちらかまたは両方と関連することを示唆する。したがって、研究3では、ネガティブ情動に関わる個人特性である抑

うつ傾向だけでなく、ポジティブ情動に関わる個人特性である主観的幸福感を取り上げ、両者それぞれが独立に懐かしさの喚起量に関連するかを調べた。抑うつ傾向及びに主観的幸福感を測定する質問紙を実施した後、研究2同様に、懐かしい音楽を用いて懐かしさ情動の喚起を行い、音楽視聴前後の懐かしさ情動の変化量を懐かしさ情動の喚起量として分析を行った。分析では、懐かしさ情動の喚起量に対する抑うつ傾向と主観的幸福感それぞれ独自の効果と、それらの交互作用の影響を調べた。分析の結果、抑うつ傾向の高さ、主観的幸福感の高さのそれぞれが懐かしさ情動の喚起量と正に関連していることが明らかになった。この結果は、情動状態に関わる個人特性の程度がその情動の方向性（ネガティブ情動かポジティブ情動）に関わらず、懐かしさ情動の喚起の程度と関連することを示している。今後は、懐かしさ情動の喚起量ではなく、懐かしさ情動の喚起による心理的变化が情動に関する個人特性によって異なるかどうかを検討していきたいと考えている。研究3の成果については、2017年度に開催される第26回日本パーソナリティ心理学会大会において発表を行う予定である。

懐かしさ情動に関しては、懐かしさ情動状態による社会的認知の変化についても現在、研究4として検討している。この研究4では、懐かしさ情動状態によって他者の信頼性評価が向上するかどうかに関心を当てている。先行研究から、懐かしさ情動状態では、社会的な繋がりや社会的なサポートの知覚が促進されることが示唆されている。そのため、懐かしさ情動状態では、他者に対するポジティブ評価が高まることが予想され、研究4によって、懐かしさ情動を喚起することで他者顔の信頼性評価が高まるかどうかを調べている。実験では、研究2、3と同様に懐かしい音楽の視聴によって、懐かしさ情動状態への誘導を行っている。そして、懐かしさ情動の誘導後に他者顔の信頼性評価をVisual Analogue Scale (VAS)によって測定している。この実験では、懐かしい音楽を聴いた後と懐かしくない音楽を聴いた後（統制条件）の間で他者顔の信頼性評価を比較することで、懐かしさ情動によって他者への信頼性が高まるどうかを明らかにすることを目指す。現在は実験を実施中であるが、予定した参加人数が集まり次第、分析を行う予定である。

※ 字数：3000字程度（英語の場合：30行×2枚（A4）程度）